

## 保育における場面の切り替えと片づけの構造

浜谷 直人・江藤 咲愛

### A structural model of children's "difficulty to move on next activity" toward clean-up time in preschool settings

HAMATANI Naoto, ETO Sae

#### はじめに

筆者は、これまで、保育場面でしばしば話題になる「場面の切り替え」について、保育場面での典型的なエピソードを紹介しながら、その構造を単純化して、図式として提示し、どう理解すべきであるかについて、保育関係者が議論できる土台をつくろうとしてきた（浜谷 2011、浜谷 2014 など）。

同時に、近年、保育現場で、子どもが「切り替え」が困難な状況を、子どもの困ったこととして指摘されて、その対応が議論されるときに、子どもを保育の予定や保育者の指示通りに動かそうとして、行動主義的なアプローチで切り替えさせるテクニックが浸透していることに対して異論を提示してきた（浜谷 2012）。そのような動向が進めば、長期的には、子どもの気持ちを不安定にし、子どもの育ちを阻害する可能性があると考えからである。さらに、保育現場に関わる発達支援の専門職が、そういう保育現場の動向を加速させる働きをしていることに対しても警鐘を鳴らしてきた（浜谷 2013）。

「場面の切り替え」とは、子どもの気持ちの切り替えでもあり、保育の活動の切り替えでもあり、かなり複雑な現象である。筆者は、その構造を図式化する作業を継続的に行い、バージョンアップを重ねてきた。本稿では、まず、現

時点における図式を示し、そこから、どのような保育実践への示唆を得ることができるかについて考察することを目的とする。

### 切り替えと片づけの構造

場面の切り替えは、保育の様々な状況で生じる。そのなかでも、大きな切り替え場面としては、例えば、典型的には、子どもが登園し、しばらく自由遊びをした後、朝の会などのお集まりに始まり、その日の主活動のために集合する状況がある。また、設定活動や自由遊びの時間が終了し、食事や午睡などへ移行する状況や、公園などでの外遊びを終了して帰りの支度をして帰園するという状況などがある。もちろん、細かく見れば、短時間でも、様々な切り替え場面はあるのだが、本稿では、上述したような典型的な切り替え場面を取り上げる。

これらは、ほぼ共通して、保育の設定として、活動①（自由遊びなど）から、活動②（集合、設定保育、食事）等への移行場面であり、そのとき、子どもが移行に合わせて、気持ちと行動を切り替えることができないということで問題になる。

ここでは、遊び場面から設定保育や食事への移行場面を念頭に置いて、切り替えるという状況はどのような構造をもつかを示したのが図1である。以下、図1を参照しながら論じる。

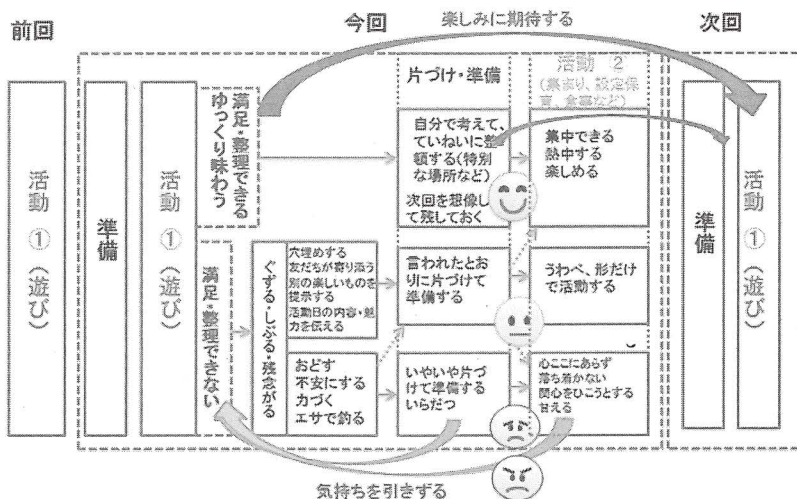


図1 切り替えと片づけの構造

活動①(遊び)に満足感を感じることで、子どもが気持ちを整理することができる場合

子どもの気持ちを尊重している保育においては、子どもが切り替えるには時間が必要であり、また、個人差もあるので、切り替え時点は、実際には、一定の幅のある時間帯になるように保育者は配慮している。その時間帯の間に、子どもは、それまでの遊びを振り返って味わいながら楽しかったという気持ちになっている。年長になるにしたがって、この遊びは、今回は、ここで終わりだが、次は、さらにこんなことをしたいというような、次回に向けての期待感をもつようになる。保育者は、子どもがそれまでの活動をゆっくり味わうことができるような時間的な間をつくり、子どもの気持ちにそった言葉かけをする。そうして、子どもなりに、活動にまつわるもろもろの思いを整理してすっきりした気持ちになる。

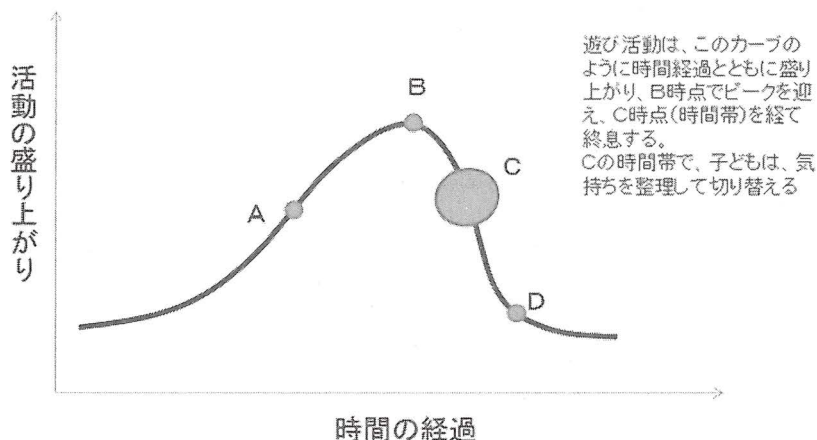


図2 切り替え時点(時間帯)と活動の盛り上がり

ごっこ遊びのような場合、子どもは、遊びの中で、遊びに必要なものを自分で製作している場合がある。気持ちを整理して片づけに気持ちを向けるとき、製作したものを壊して片づけるのではなく、大事に残しておきたいと考えることがある。それが大きいものであれば、全部をそのまま残すことはできないにしても、この部分だけは残しておきたいと考えるのは自然なことである。

また、次回にも、この遊びの続きを楽しみたいという期待感をもてば、その製作した大事なものを、壊れさせないようにしたいと考えとか、あるいは、他の子どもが勝手に使ったりしないように、特別な場所にしまっておこうと考えるのも自然なことである。しばしば、子どもたちの自分だけのロッカーには、いろんなものが隠れてぎっしりになっている光景をみるが、そこに詰まっているものは、子どもがそういう気持ちになったときに、こっそりと隠したまま忘れられているものだったりする。また、製作した物が大きなものであれば、特別に事務室にとっておいてくれるようにと預けに来る場合もある。

また、次回への期待感が具体的にイメージできれば、遊びに使ったいろいろな道具や玩具についても、一つひとつ、どこに片づけるかと、自分なりに考え

工夫する。

このようにして、保育の移行場面で、子どもの気持ちに寄り添い、子どもの気持ちが整理することを大切にしている保育においては、片づけは、けっして、決まった場所や元の場所に道具などを戻すとか、使った場所をきれいにするという生活習慣という言葉だけで理解できるものではない。

つまり、片づけは、これまで楽しく遊ぶことができたことを振り返ることと、次の遊びへの準備という意味があるので、子どもは自ら片づけ方を工夫する。それは、創造的な作業であり、楽しいので、しだいに子どもは片づけることに熟達していく。実際、年長児になれば、大人も驚くように、楽しそうで見事な片づけの姿が見られるようになる。

片づけと活動②に向けての準備を、楽しく肯定的な気持ちをもってできれば、子どもは、活動②においても、それに集中し、熱中して楽しむことができる。

以上を図示したのが、図1の上段部分になる。

#### 活動①（遊び）に満足感を感じることができない、気持ちを整理しない場合

活動①が盛り上げに欠けて、ダラダラしていた場合、子どもは、活動①に満足感を感じることができない。また、活動①が楽しく盛り上がるはずの場合でも、これから遊びが楽しくなる時点（図2のA時点）や、今がピークの時（図2のB時点）では、子どもは活動①を終了することができないので、切り替えることに抵抗することは自然なことである。また、活動①が図2のD時点までに達した場合、つまり、遊びの楽しさがすっかり終わって気持ちがしぼんでしまっている場合には、その遊びの続きをしたいという期待感をもつことが難しい。

以上のような場合は、気持ちを整理することがないので、図1の下段のように、切り替えを指示されたときに、子どもは、ぐずる、しぼる、残念がる、というような気持ちになる。

そこで、保育者が、保育のスケジュールに合わせて子どもに移行をうながす

ために、様々な対応をすることになる。

例をあげる。

【エピソード1 「子どもの満たされなかった気持ちを穴埋めする」 保育園、年中クラスのPDD児（KA君）についていた加配保育士（ARA先生）の語り】

ARA先生は、普段、KA君に寄り添うようにして保育していた。その日は、たまたま、職員の手が足りなくて、ARA先生が給食の用意に入らなければいけない状態だった。KA君は、担任の先生とクラス全体の中で遊んでいた。そのため、KA君は、ARA先生と、ふれあう時間がまったくなかった。

給食の用意が出来たので、ARA先生は、KA君に、「トイレに行こうか、待たせたね」と言って誘った。廊下の途中で、「待たせたね、寂しかった？」と聞いたら、「寂しかった」と答えてくれた。そんなことを言えたのは初めてだったので嬉しかった。「ごめんね、ちょっと、今日は忙しかったんだ」と、トイレに行った。

KA君はもうトイレで遊ぶ段階を過ぎていて、普段は、トイレで遊ぶ子ではないのに、その日は、4つあるトイレのうち、「どれにする？」みたいな顔をして、1歳とか、2歳の子がうろうろして、親にもたつかせて、早くしなさいと言われるような遊びをした。

そのときに、ARA先生は、「さっき接していなかった時間を穴埋めしているのだな」と感じた。通常の親子だと、こういう場合、早くしなさい、と言うが、これは、必要な時間を彼は取り戻しているのだと思い、しばらく、一緒に付き合おうと思って、「どこにするー」、「どこに、しようね」という感じで、ゆっくり覚悟を決めて待ったら、「じゃ、ここ」と言って自分で決めた。

普段よりはずっと時間かかったが、それを覚悟して、ゆっくり待ってや



ると、スムーズに部屋に戻っていった。その後、給食が始まって、「お腹すいてるよね」と言いながら、部屋に入ると、その後は、すっきりしていた。

このエピソードでは、前の活動（活動①）で、子どもが満たされなかった気持ちを、保育者が時間をかけて付き合うことで、一種の穴埋めをしている。その対応で、子どもはある程度気持ちが満たされたので、その後の食事（活動②）には、満たされなかった気持ちを引きずることがない。

このように、子どもの気持ちを活動①から活動②に向けようとしたときに、子どもが、ぐずったり、しぶる時に、保育者はいろいろな打開策を講じる。

例えば、活動①の魅力を伝えようとする（食事のメニューが大好きなものであるとか）ことは、もっとも頻繁に見かける打開策である。また、友だちが活動②に向けて誘ってくれることで、気持ちを切り替える場面もよく見かける。あるいは、手を洗うことをしないときに、先生と手をきれいにする競争をしようというような形で、別の楽しい活動として提示して、気持ちを転換したうえで活動②に気持ちを向けていくこともある。

そのような取り組みで、子どもが気持ちの切り替えをできると、先生の指示したとおりや、皆と同じように片づけて次の活動の準備をすることになる。ただ、子どもなりの遊びの振り返りや期待感に基づいたうえでの片づけや準備ではないので、いわば、言われたとおりにするもので、子どもなりの工夫がうみだされていくことにはならない。

また、活動②に移行したとき、エピソード1では、気持ちの穴埋めができることで、活動②に楽しく向かっていくことができたが、しばしば、このような対応だけでは、子どもは活動に集中したり熱中することができないために、うわべの形だけ取り組むということになることが少なくない。

### 活動①（遊び）から強制的に活動②に移行する場合

子どもが活動①のときに十分に遊び込んでいない時点で切り替えを要する時、あるいは、気持ちを整理する時間をとることなく、移行を促すことがある。とくに、近年目立つのは、低年齢から、保育のスケジュールに基づいて、時計を目安として時間を決めて切り替えを促す状況が増えていることである。

そのような場合、切り替え時に子どもが感じる気持ちのわだかまりは、片づけや準備の時間、さらには、活動②にまで引きずっていくことになる（図1の下段の矢印）。

次のエピソードでは、時間で切り替えようとしていたときには、子どもが切り替えに抵抗していたが、保育者が、それを反省して、子どもの気持ちの流れを大切にするように保育を改善した事例である。

#### 【エピソード2 「時間を忘れてゆったりしていたら子どもたちから切り替えた」 2歳児担任の語り】

2歳児クラスの、能力は高くいろいろなことが良くできるが切り替えが難しいS I君について、カンファレンスで相談したところ、場面の切り替えの時に子どもの姿ではなく時間で管理をしているのではないかという指摘を受けた。“何時になったら〇〇するという管理”が子どもの切り替えを阻むのではないかと。振り返ってみると、確かに保育をしていると時間に追われている自分に気が付いた。それから多少時間がずれることも頭に入れて子どもの姿を見て、遊びの山を越えて少し落ち着いたら帰るということを徹底した。すると公園に行っても、それまでとは違って驚くほどスムーズに帰れるようになった。

正月明けに、久しぶりに近所の遊具のない公園へ散歩に行った。井戸のところで、ジュース屋さんなどのごっこ遊びをしたり、7匹のこやぎごっこをするのが大好きな子どもたち。久しぶりに友だちに会えた嬉しさもあり、トラブルもなくそれぞれに好きな遊びを友だち同士で楽しむ姿に私も



微笑ましく見ていた。

あまりの微笑ましさに時計も見ずに帰りのことをすっかり忘れ、あわてて「ごめん！ごはんの時間なのに時計みてなくて遅くなっちゃった！」と声をかけた。すると私のあわてぶりに「忘れちゃったの？」みんな笑いながら帰りの支度。その時の子どもたちの切り替えが早かったこと！結局いつもの時間に園に到着した。保育者のゆとりが子どもの遊びを豊かにするのだとわかった。

このエピソードでは、ぐずった気持ちが、その後まで続いたときには、子どもたちは、公園での遊びを片づけることや、帰り路に気持ちを集中することがないので、移行する際に必要以上に時間がかかってしまう。保育者が思わず、時間を忘れたほどに、たっぷり満足するまで子どもたちが遊んだときには、子どもの方が、てきぱきと片づけて帰路に向かっている。

このエピソードとは対照的に、強制的に子どもを次の活動②に移行させようとするこゝともしばしば見かける。それは、諸般の事情で、仕方がない時もある。そういうときに、子どもの気持ちを汲んで、保育者が子どもに事情を話したり、遊びを中断することを謝ったりして、気持ちを整理できるようにする場合があるが、子どもがぐずり、しぼり、時には激しく抵抗するのに対して、おどしたり、不安にさせたり、力づくで移行させようとするこザを見かけるときがある。

そのようなときには、片づけのときだけでなく、活動②になった時にも気持ちを引きずり、心ここにあらずで、活動に集中できないばかりでなく、故意に人が嫌がるこザをして関心を引こうとしたり、必要以上に甘えたり、ときには攻撃的な行動をするこザになる。

## おわりに

切り替えに関わるこザについて、筆者の子ども時代を振り返ってみる。遊びに熱中してゐて、まだ遊び続けたい気持ちが強いときに、親や先生からやめる

ように促される。そういうとき、隠れてでも、もっと遊ぼうとしたという記憶ばかりが蘇る。子どもは、いつの時代でも、大人の片づけなどの指示には抵抗し、もっと遊ぼうとしていたのではないだろうか。

30年も前になるが、筆者が、保育現場に通い始めた当時、保育者は、時間のことよりも、まず、子どもたちの気持ちの流れを理解しようとし、それに寄り添い、尊重している姿が普通だったように思いだされる。

ところが、近年、時計という物理的な時間を指標として、保育をスケジュール化して、スケジュール通りに保育をすすめ、子どもを動かすことができることが、正しい保育であるかのような考えが保育現場に浸透してきている。背景には、保育者が行政や保護者から時間で管理されるようになったこと、さらには、保護者が職場などで時間管理される傾向が強化されたこと等、社会全体の時間意識の変化があるのかもしれない。

大人社会の論理は、それは、それとして簡単には抗いがたいのではあるが、その論理を、子育てや保育に持ち込むことは、子どもの発達の土台を危うくする。

保育では、子どもは、様々な活動を経験する。それを時間で管理して移行を促し、切り替えさせるようにすると、確かに、それに適応する子どもが出現してくる。そういう子どもの姿をよく見てみると、期待されたように行動する、決められた通りにする、さらには、言われたことをこなす、処理してるだけではないかと心配になる。

子どもは、遊ぶことも、食事をすることも、お集まりで先生の話聞くことも、絵を描くことも、どれひとつとっても、それらを、こなしたり、処理しては、豊かに発達することはできない。

それぞれの活動場面で、ワクワクしたり、熱中したり、友だちと一緒に格闘したり、密度の濃い時間を過ごすこと、言い換えれば、たっぷり味わうことで、豊かな発達は実現する。

そういう密度の濃い活動をしている子どもは、切り替え時には、「もう少し、

待って」とか「今、いいところだから」と言ったりして、簡単には切り替えられないのが自然な姿である。

それは、発達障がい児でも、基本的に変わらない。ところが、特別支援の保育現場では、各種の視覚的な素材を用いて、切り替えを円滑に進める技法が浸透してきている。それは、図1の下段に示したものに相当する打開策である。視覚的なガイドによって切り替えると、子どもは、行動レベルでは、活動①から活動②に移行するが、その後、満たされない気持ちを引きずることになる。さらには、満たされない気持ちが蓄積されて悪質で頑固な感情に転化する。そのため、長期的には、子どもも保育もかえって大きな困難をかかえることになる。

図1には、ニコニコ顔、シブシブ顔、イライラ顔を挿入してある。この図を手掛かりに、保育関係者が「切り替え」について意見交換・議論をしていただきたいと考え、そのために可能な限り分かりやすい図にしたつもりである。

保育者の願いは、子どもが、ニコニコ顔になって、毎日を過ごすことであろう。「切り替え」場面とはなんだろうかと、その本質を考えることは、子どもが活動に熱中してニコニコ顔になる保育を創ろうとするときに、格好の切り口になるのではないだろうか。

## 文献

- 浜谷直人 2011 場面の切り換えから保育を考える：活動の間の気持ちのつながりをつくる 季刊保育問題研究 247号 126-138
- 浜谷直人 2012 特別支援教育における心理学の専門性と教育実践の関係：その危機に関する考察 心理科学第33巻2号 13-22
- 浜谷直人 2013 保育実践と発達支援専門職の関係から発達心理学の研究課題を考える：子どもの生きづらさと育てにくさに焦点を当てて 発達心理学研究 第24巻 第4号 484-494
- 浜谷直人 2014 保育者が遊びに熱中した実践における場面の切り替えの構

造：発達支援専門職が実践知を学ぶ試み 教育科学研究（首都大学東京教育学研究室） 第28巻 13-26

付記 エピソードの使用を許可くださった、お二人の保育士の方に感謝申し上げます。

著者

浜谷 直人 江藤 咲愛\*

\*公立幼稚園

Naoto Hamatani Sae Eto

英文タイトル

A structural model of children's "difficulty to move on next activity"  
toward clean-up time in preschool settings